

## 土壌物理学会の役割は何か

長谷川 周一\*

「土壌の物理性」の第1号が出版されたのは1959年であり、現在の会員のほとんどは当時を知らない。外国では、E.C. Childs, L.A. Richards, W.R. Gardner, J.R. Philip らが活躍されていた頃である。当時の会員数は約150名であり、その後の推移はわからないが、20年前の1983年には679名と非常に多くの会員が研究会を支えている。土壌物理研究会から土壌物理学会に変更したのは1999年である。会員数は1993年は556名、そして2003年の現在は460名と10年単位で100名近くの減少率である。研究会設立後45年近くたった現在、以下のことから学会の役割を深く考えていく必要がある。

会員は学会誌に論文を投稿する権利があるが、「土壌の物理性」に対しこの権利を行使することに、どれほどの人が魅力を感じているだろうか。研究者がインパクトファクター等で画一的に評価される現実では、国際誌しか評価の対象となくなってきた。また、学会誌以外にも国際的に評価される雑誌も数多くある。さらに、多くの会員にとっては土壌物理学会が第2学会であることも事実であろう。周囲の研究者を見ていると、国際的に注目されそうな研究成果が得られた時は、アメリカ土壌学会誌 (SSSAJ) やヨーロッパ土壌学会誌 (EJSS) のような国際誌に投稿し、掲載されることに喜びと誇りを感じている。特に若い研究者に対しては、まず国際誌に投稿し、却下されたら国内誌にしたらと勧めている会員は私を含めて多いと思う。このことと「土壌の物理性」の論文の価値とは別である。

研究を発展させるための情報を、国内および外国の少数の学会誌から得てきた20年前とは非常に異なって、現在はインターネットを通して非常に多くの情報が容易に手に入り、「土壌の物理性」を読むことによって得られる情報は相対的に非常に少なくなっている。さらに会員が国際誌を含む複数の雑誌に投稿するようになってきているので、「土壌の物理性」からは、自分の研究が評価できない。言い換えれば、自分が興味のある分野の現在の到達点と進むべき方向性が見えてこない。土壌物理学会の役割は論文の掲載と情報発信だけでは時代遅れになっている。

土は物質循環の要であり、正しく理解し、上手に利用しなければならない。作物生産のための科学は、多くの他の分野と同様に、土壌物理においても長年の研究の蓄積を通して発展し、教科書に見るように、その研究手法を説明できる。最近では、研究の方向が作物生産から環境にシフトしてきているが、我々は未だ、現在の環境状態を定量化するのが精一杯で、研究の道筋を明確にすることが出来ていない。このことが土壌物理研究は停滞していると感じさせ、魅力を感じさせないのかもしれない。

これも20年前と異なり、個々の会員が忙しくなりすぎている。学会事務の一部を日本学会事務センターに委託したが、現在も、手弁当で学会事務局を運営しており、特に中堅の研究者は多忙をきわめている。学会に入ると、その運営にも引き込まれるおそれがあるという理由で、論文を出したときだけ学会員になるということも聞く。

以上のように悲観的にみてきたが、このまま推移していったら、土壌物理学会が解散したらどう

なるかと考えると、ことの重大さに気付く。

研究を進展させる段階では2通りの情報源がある。一つは過去の文献情報である。もう一つは、同僚（時には先輩）との議論である。これは個人レベルでの研究の発展ばかりでなく、研究分野の発展にも当てはまる。文献情報は論文に加え、講座やレビューを通して、議論はシンポジウムやポスター発表を通して、学会が担っていると考えると良いだろう。特に、文献情報では決して得られない、研究者同士が本音で議論できる場合は、個人の自主的な参加により成り立っている学会しか設定できない。

シンポジウムと同時に行われるポスター発表は数年前から実施されており、良い企画である。会場では若い研究者、院生が多く活気に満ちている。彼らを育て上げるのは学会としての責務である。また、農業研究機関においては、土壌の物理性が関与する応用問題は多い。失敗の研究は論文としては見ることは出来ないが、議論の対象にはなり、大きな糧を与えてくれるだろう。会員一人一人がもっと視野を広げて、相互に交流し、議論していくことが研究の発展にとって必要である。そして、これを支援していくことが土壌物理学学会の役割だと感じるが、具体的な方策を持ち合わせていない。

土壌物理学学会に対し多くの会員、とりわけ研究の蓄積が豊富な会員の積極的な関わりを期待したい。